

指導ポイント

かけ算の意味

かけ算が用いられるのは、1つ分の大きさが同じで、それがいくつ分あるときに、その全体の大きさを求める場合(1単位が a である量が n 単位あるときの全体の量 $a \times n$)です。したがって、かけ算の意味指導にあたっては、まず、「同じ大きさの集まり」に着目させることと、それが「いくつ分」あるのかをはっきりと意識づけることが必要です。

そこで、啓林館の教科書では、まず、遊園地の乗り物に乗っている人の数を調べるという、児童にとって身近な題材(分離量)を取り上げ、「何個のいくつ分」という基準量を意識した表現を学習します。

かけ算の式を学んだ後も、指導にあたっては、基準量は何であるのかをしっかりとらえさせることが大切です。「何のいくつ分」かをはっきりとつかませた上で立式させるようにしましょう。特に抽象式から答えを求めさせる場合に、基準量があいまいにならないように注意させたいところです。

「倍」という用語

日常生活で、「あの建物の高さはこの建物の高さの倍あるね。」というように「倍」という用語を使うときは、「2倍」の意味を指すことが多くあります。児童のつまずきの1つは、この日常生活とのずれです。算数では、基準量の〇つ分ということから「〇倍」と表現しますが、普段からこのことを意識していきたいものです。

また、「〇倍」が新しい用語として着目されますが、「～の〇倍」というように、「〇倍」は「～の」という基準量と組み合わせてとらえることが大切です。基準量がきまっていて、はじめて1倍、2倍、3倍の大きさが決まることをよく理解させるようにしましょう。

「1倍」については、「2倍」や「3倍」と違って操作自体には変化がないので、児童は理解しにくいものです。図や具体物を使って、「2倍」や「3倍」との比較を通して、「1倍」をとらえさせるようにするのが大切です。







